

### III 遺物

#### 1. 土器類

調査区の全域から、多量の奈良時代の土師器・須恵器が出土した。他に少量であるが、奈良時代の製塩土器、土馬、祭祀用のミニチュア土器、二彩・三彩の鉛釉陶器、須恵器羊形硯と、12～13世紀の瓦器椀・土師器杯がある。出土土器の大半は調査区内に散在する土壙SK2407・2408・2410・2412、東西溝SD2401より出土したものであり、いずれも奈良時代前半に属する。これらの土壙・溝の出土土器には互に接合するもの、あるいは明らかに同一個体とみられる破片を含んでおり、奈良時代前半の一時期に、四坊坊間路を除く調査区のはほぼ全域が塵芥処理の場として用いられたことを示している。このことは、奈良時代前半期の建物遺構が希少なことと併せて、この地域の性格を考える上に重要な事実であろう。奈良時代後半～末頃には、各時期の建物群に近接して2カ所の土壙SK2406・2409がつくられた。いずれも奈良時代前半の土器に混って、奈良時代後半～末頃の土器が少量出土している。奈良時代の遺構面を覆う包含層からもかなりの量の土器が出土した。土壙群と同じく奈良時代前半の土器が主体であり、奈良時代後半の土器少量と、数個体の瓦器椀を含む。以下、各遺構の出土土器を中心に説明する。なお、土器の器種名・製作技法の分類と呼称については『平城宮発掘調査報告』に従うこととする (fig. 9)。

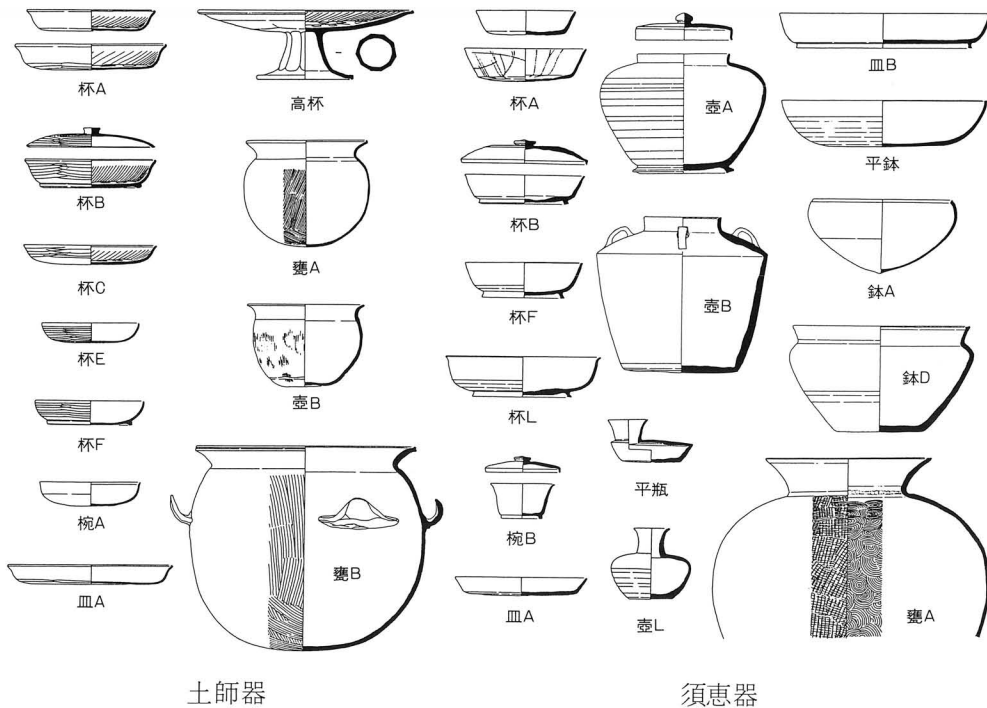


fig. 9 器種一覧

### SK 2407・2408 出土土器 (fig. 10・22)

土壙SK 2407・2408は東西に接して作られた土壙であり、出土土器もかなりの部分が互に接合する(3・9・10・11・14・15例)。煩雑を避けるため両者の出土土器を併せて説明する。なお、須恵器甕の体部破片では土壙SK 2412 出土土器と直接接合するもの3例があり、この3カ所の土壙の埋没がほぼ同時期であったことがわかる。

土師器 杯A・杯B・杯F・蓋・椀C・皿A・高杯・壺A・壺B・甕A・甕B・製塩土器がある。杯A I (1)は、底部外面をへら削りするb<sub>0</sub>手法。内面にラセン暗文・方射状暗文(以下ラセン文・放射状文)をもつ。平城宮I群土器<sup>(1)</sup>。杯B(4)は、口縁部外面をへら磨きするa<sub>1</sub>手法。ラセン文・放射状文をもつ。連弧状文の存否は不明。杯F(3)は、底部外面をへら削りした後、口縁部外面を密にへら磨きする。内面はヨコナデのまま仕上げ、暗文はない。杯B・杯Fともに平城宮II群土器(以下II群土器)。高杯(6)は縦方向のへら削りで脚柱部を10角に面取りする。杯部下面を横方向にへら削りし、上面にラセン文と放射状文をもつ。脚裾部はヨコナデして仕上げる。I群土器。椀C(5)は内面と口縁部外面上端をヨコナデにして仕上げるe手法。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・杯L・杯L蓋・椀B・椀B蓋・盤A・鉢A・壺A・壺A蓋・甕A及び甕類の体部破片が少量ある。杯A III(9)・杯A IV(7・8)・杯B III(15)・杯B V(12)・椀B(11)はいずれも底部外面へらキリのままで不調整。杯B IV(13)は底部外面をへら削りした後、ロクロナデで仕上げる。杯B III蓋(14)も頂部上面をへら削りした後、ロクロナデで仕上げる。頂部下面中央部が磨耗して墨が付着しており、「杯蓋硯」として使用されたことがわかる。また、椀B(11)と蓋(10)とは、黄灰色の特徴ある胎土と自然釉の状態が酷似することから、同一窯の製品であり、本来一組として作られたものと推定される。須恵器の製作に使用されたロクロの回転方向はいずれも右回転。

### SD 2401 出土土器 (fig.10・22)

東西溝SD 2401は土壙SK 2407・2408に重複し、これらに先行する溝である。土器の出土量は少ない。なお、SD 2401 出土の須恵器甕の体部破片には土壙SK 2410 出土品と直接接合する例があり、この両者の埋没時期がほぼ同時期であった可能性がある。

土師器 杯A・高杯・蓋・壺A・甕Bがある。杯A II(16)はa手法。I群土器。杯A II(17)はb手法。II群土器。いずれも内面にラセン文と方射状文をもつ。口縁部外面のへら磨きは器面の風化のため不明。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・皿B・壺A蓋・平瓶・甕類の体部破片がある。杯A II(18)は、底部外面へらキリのままで、口縁部内外面に火襷がある。杯B III(23)も底部外面へらキリのままの不調整。杯B蓋(19~22)はいずれも頂部上面をへら削りした後、ロクロナデで仕上げる。なお、SD 2401 北方の掘立柱建物SB 2394の南側柱列西第2の柱穴埋土より蓋(22)の破片が出土している。小形の平瓶(24)も底部外面はへらキリのままの不調整。ロクロはいずれも右回転である。

### SK 2406 出土土器 (fig. 10・22)

土壙SK 2406は土壙SK 2407の南に接し、SK 2407の埋没後新たに作られた土壙である。土器の出土量はわずかである。土壙SK 2407に一部重複することから、出土土器には新旧の形態が混在し、須恵器甕の体部破片にはSK 2407出土土器と直接接合するものを含む。

土師器 杯A・杯C・皿A・高杯・甕Aがある。高杯の脚部(29)は円筒形の脚柱部をヘラ削りで12角に面取りする。SK 2407出土例(6)に比べ、長脚化の傾向が明らかである。I群土器。甕A(26)は体部外面を縦ハケメ、口縁部内面を横ハケメで調整した後、頸部と口縁部の内外面をヨコナデして仕上げる。体部内面には成形時の指頭による凹凸をそのまま残す。内方に巻き込む口縁端部は奈良時代後半に一般化する形態である。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・杯C・杯F・杯L・鉢A・壺A・壺A蓋・甕類の体部破片がある。杯AⅢ(30)は底部外面ヘラキリのままで口縁部内外面に火禿がある。杯AⅣ(27・28)も底部外面ヘラキリのままで不調整。杯BⅢ(32)は底部外面ヘラキリのままで、底部と口縁部の屈曲部に断面逆台形の高台をつける。杯BⅢ蓋(31)は頂部上面をヘラ削りの後、ロクロナデで仕上げる。口縁部は断面S字状に屈曲する。31・32ともに奈良時代後半～末に一般化する新しい形態。杯F(33)は底部外面と口縁部下端をヘラ削りし、口縁端部にわずかに内方へ傾斜する面をもつ。器面はヨコナデ・仕上げナデにより極めて平滑に仕上げられている。杯L(25)は底部外面をヘラ削りし、丸底風の底部と口縁部の屈曲部よりかなり内方寄りに高台をつける。屈曲部より外反して立ちあがる口縁部は上端でさらに外反し、端部は丸くおさめる。この杯F・杯Lの特徴ある形態は金属容器である佐波理鏡、あるいは金銅鏡の形態を模倣して作られたものであり、いわゆる「鏡形」の須恵器に当る。ロクロはいずれも右回転である。

### SK 2412 出土土器 (fig. 11~14)

土壙SK 2412は調査区西南部に位置する平面不整形の浅い皿状の土壙である。調査区の遺構から出土した土器の約1/2量がこの土壙から出土している。SK 2412出土土器は土師器・須恵器ともに器種が豊富であり、墨書土器10点の他、三彩小壺1・土馬3点を含んでおり、奈良時代前半の平城京で使用された土器の実態をうかがえる好資料である。なお、SK 2412出土の須恵器横瓶に直接接合する破片が東北部の土壙SK 2410から出土しており、両者の埋没がほぼ同時期であったことが推測できる。

土師器 杯A・杯B・杯C・杯E・杯F・皿A・碗C・高杯・鉢B・壺B・甕A・甕Bがある。杯AⅠ(34~37)はいずれも底部外面をヘラ削りするb手法によるもの。内面にラセン文・放射状文をもつ。34は口縁部外面にヘラ磨きが認められる。35~37については、器面の風化のため不明。34・35はI群土器、36・37はII群土器。杯AⅡ(38)はb<sub>0</sub>手法で、暗文・口縁部外面のヘラ磨きはない。I群土器。杯AⅡ(39~41)は内面にラセン文・放射状文をもつ。39はb手法、40・41はa<sub>0</sub>手法・a<sub>1</sub>手法による。木葉痕は認められない。39~41いずれもII群土器。杯C(42~46)はいずれも底部外面不調整のa手法で、内面にラ

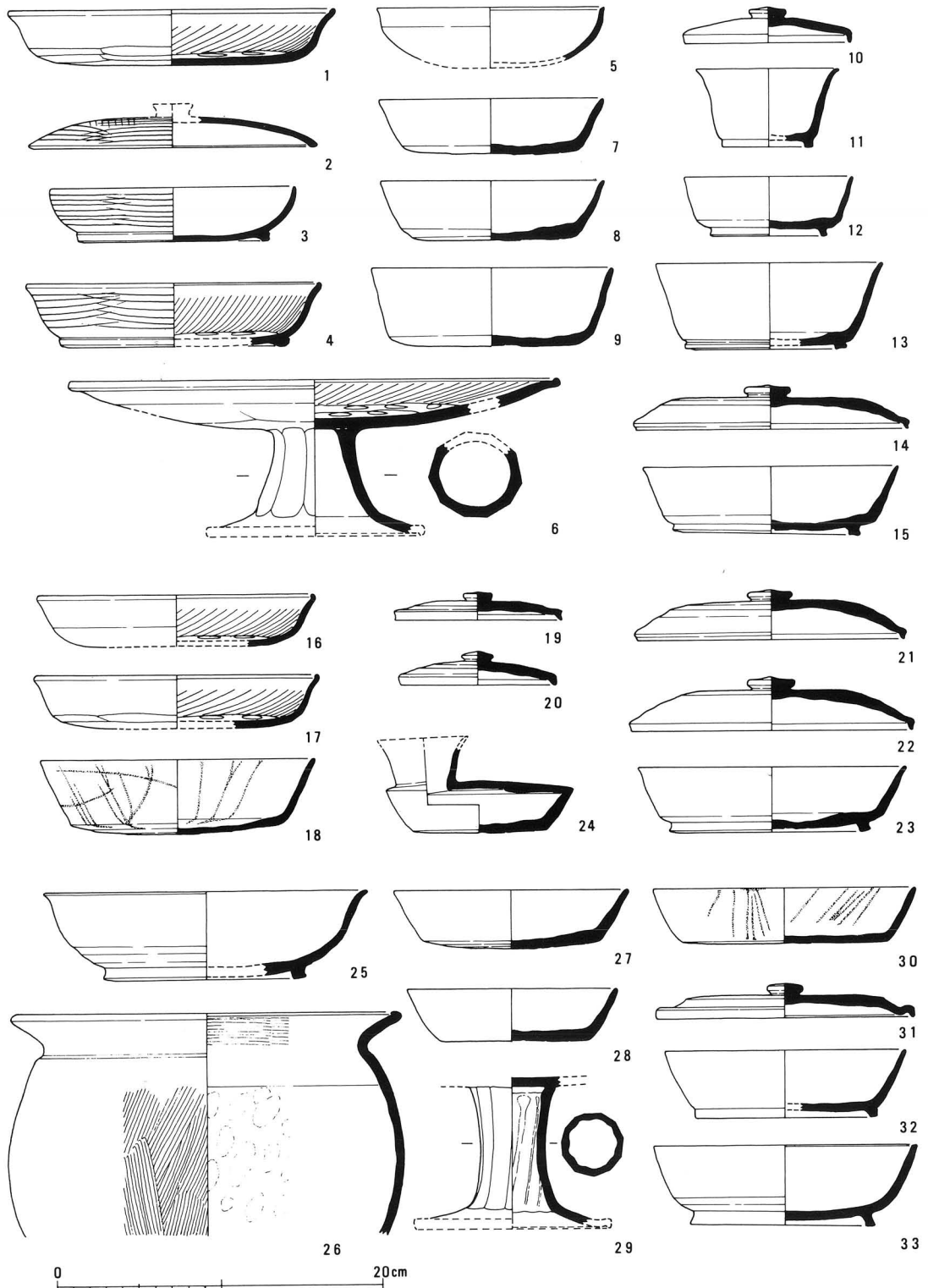


fig.10 SK2407・2408 (1~15)、SD2401 (16~24)、SK2406 (25~33) 出土土器実測図

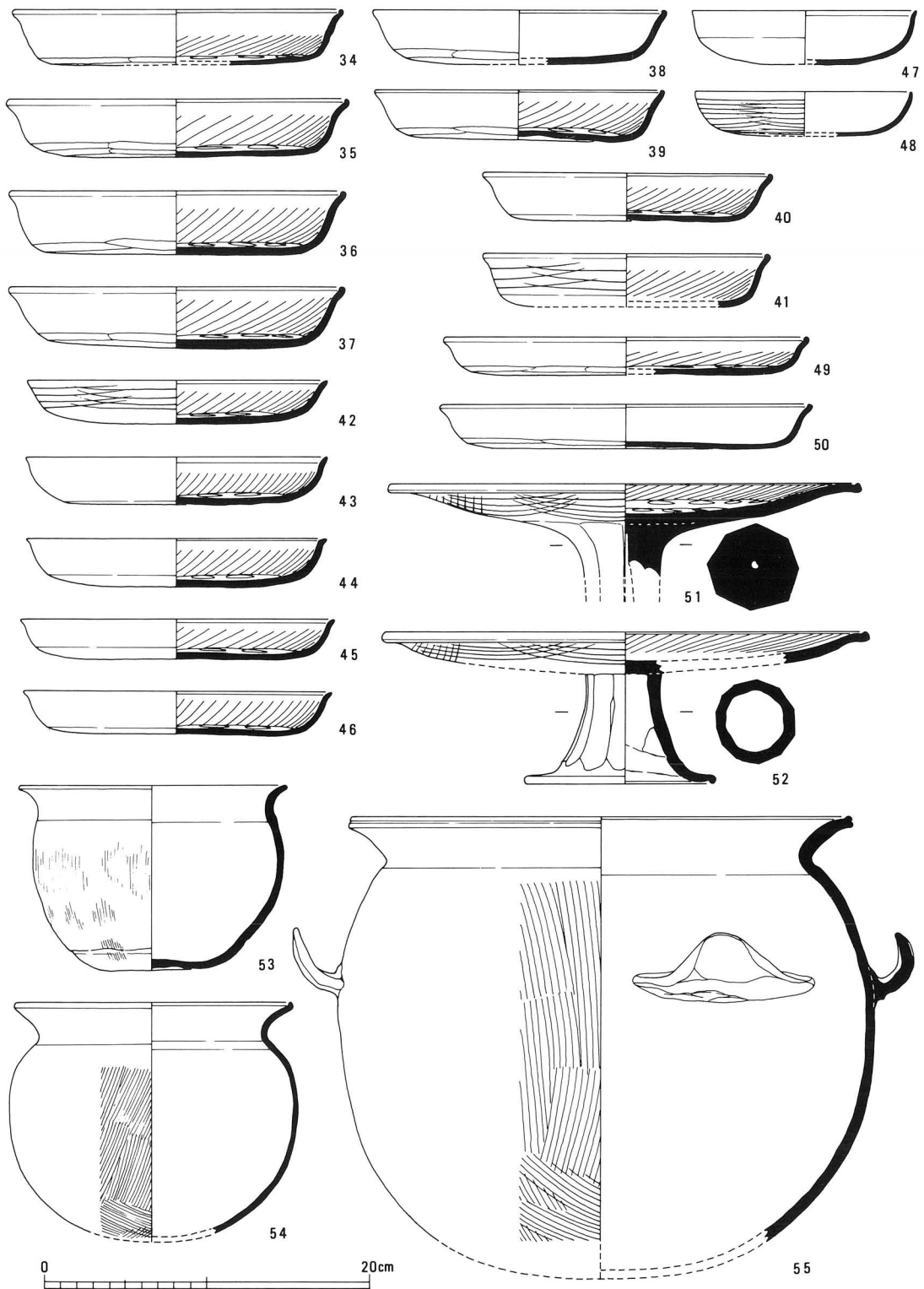


fig. 11 SK2412出土土器実測図(1)

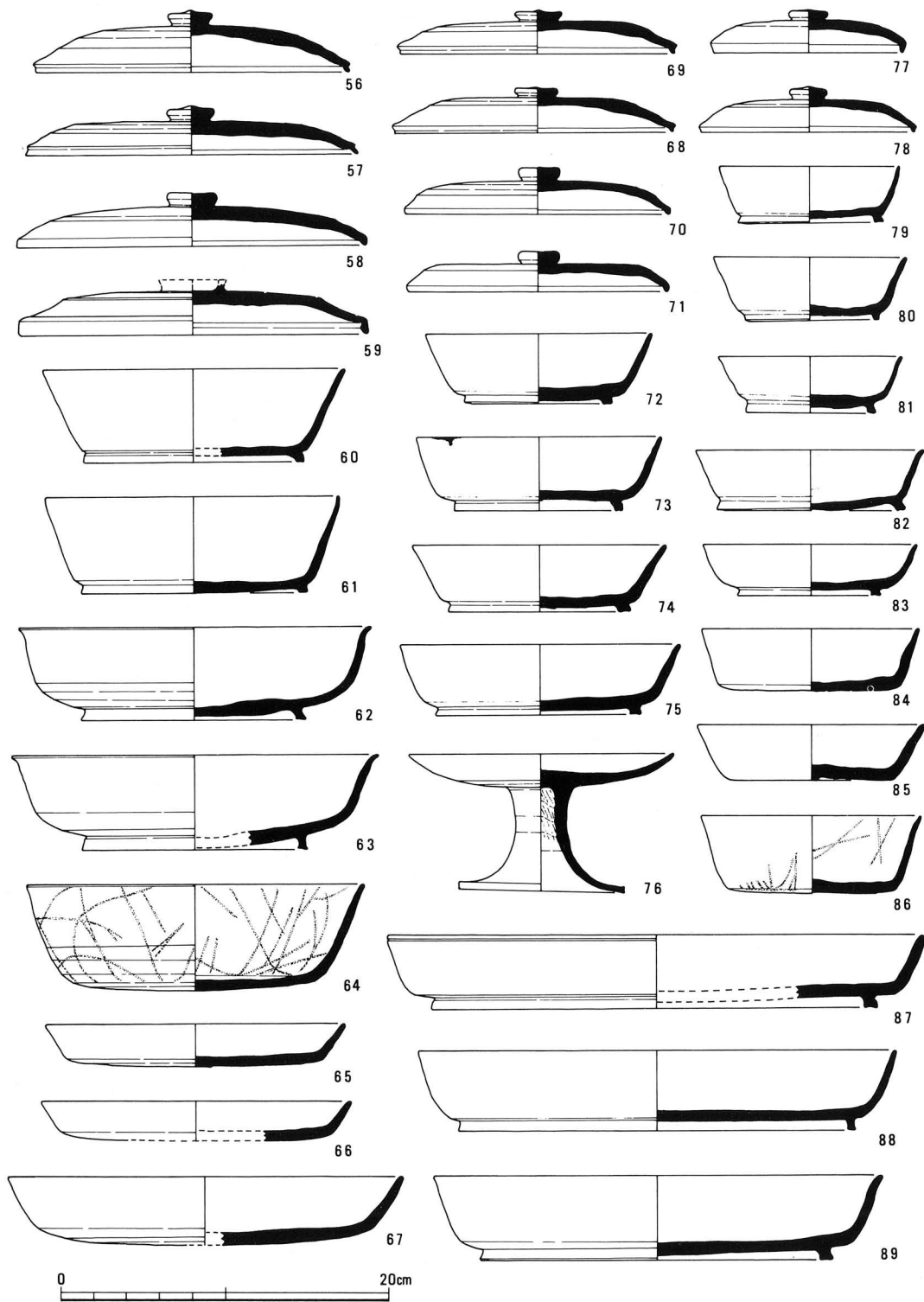


fig. 12 SK2412出土土器实测图(2)

セン文・放射状文をもつ。42は口縁部外面をヘラ磨きする。44～46は器面の風化で不明。42～44はⅠ群土器、45・46はⅡ群土器。杯E（48）は底部外面をヘラ削りした後、底部外面と口縁部外面を密にヘラ磨きする $b_3$ 手法。内面はヨコナデで仕上げ、暗文はない。椀C（47）は $a_0$ 手法。杯F・椀CともにⅡ群土器である。皿AⅠ（49・50）はいずれも $b_0$ 手法によるもの。49は内面にラセン文・方射状文をもつ。50は暗文をもたない。49・50ともにⅠ群土器。高杯（51・52）は杯部下面を数回に分けてヘラ磨きし、上面にラセン文・放射状文をもつ。51は成形の際に、丸い棒状のものを心にして脚柱部を作り、外面を縦方向のヘラ削りで8角に面取りして仕上げている。52は逆位で、脚柱部上端から粘土紐を巻き上げて、円筒形の脚柱部と脚裾部を成形しており、内面に粘土紐の痕跡を残す。脚柱部外面は51と同じく縦方向のヘラ削りで12角に面取りして仕上げる。52はⅠ群土器、51はⅡ群土器。他にⅠ群土器の脚部が2個体分出土している。壺B（53）は体部外面を一旦縦ハケメで調整した後、内外面をナデによって平滑に整え、さらに口縁部内外面をヨコナデして仕上げる。体部下端に底部の成形に関係するとみられる環状のアタリ（凹み）が残る。恐らく型を利用して底部の最終成形（底部の外方への押出し）を行なった痕跡であろう。甕A（54）は体部外面を縦ハケメで調整し、内面は成形時の凹凸を残す。頸部・口縁部をヨコナデして仕上げる。口縁端部は端面が側方にあり、上端がわずかに突出する。同形態のものが他に4個体ある。いずれもⅠ群土器。甕B（55）も基本的な器形。製作技法は甕Aに共通するが、大形であり、体部側面に相対する2個の把手をもつ。同形態のものが他に3個体ある。いずれもⅠ群土器。

須恵器 杯A・杯B・杯L・皿A・皿B・皿C・高杯・鉢A・平鉢・鉢D・鉢X・盤A・壺A・壺A蓋・壺B・壺L・平瓶<sup>(2)</sup>・浄瓶・横瓶・甕A・甕B・甕Cがある。杯AⅠ（64）は底部外面と口縁部下半をヘラケズリし、口縁部内外面に火襷がある。杯AⅣ（84～86）はいずれも底部外面ヘラキリのままで不調整。杯BⅡ（60・61・75）は器高6.0cm前後の杯BⅡ-1（60・61）と器高4.0cm前後の杯BⅡ-2（75）の2種があり、いずれも底部外面をヘラ削りした後、ロクロナデで仕上げる。杯BⅡ蓋（56・57・58）は頂部上面をヘラ削り・ロクロナデで仕上げ、扁平な宝珠形の鈕をつける。口縁部の屈曲はほとんどなく、端部は断面三角形で下方に突出する。57は「杯蓋硯」として使用。杯BⅢは9個体中73を含む2個体が底部外面をヘラ削りの後にロクロナデで仕上げ、74を含む他の7個体はヘラキリの後ナデで仕上げる。73は口縁部上端の3ヶ所に煤が付着しており、燈火器として用いられたことがわかる。杯BⅣ（72・83）も底部外面をヘラキリ後、ナデで仕上げる。杯BⅣ（82）は灰褐色の特徴ある胎土をもち、底部外面の外周をヘラ削りし、中央部に糸切痕を残す。杯BⅤ（81）も底部外面中央に糸切痕を残す。胎土・調整の特徴は82に同じ。東海地方の窯の製品か。杯BⅢ蓋（69～71）は頂部上面ヘラ削り・ロクロナデで仕上げる。杯BⅢ蓋（68）は頂部のヘラ削り調整を省略しヘラキリのままロクロナデして仕上げる。鈕や口縁端部のロクロ成形のシャープな68・69と丸みをもつ70・71との2群があり、それぞ

れ杯BⅡ蓋の56・57と58の形態上の特徴に一致する。恐らく生産地（窯）の違いを示すものであろう。69・70は「杯蓋硯」として使用されている。杯BⅤ（79・80）は底部外面へラキリのまま不調整。杯BⅤ蓋（77・78）は77が頂部外面へラキリ・ロクロナデ、78はへラ削りの後、ロクロナデで仕上げる。杯L（62・63）は底部外面へラ削りで、内面はロクロナデと仕上げナデにより平滑に仕上げる。環状の鈕をもつ杯Fあるいは杯Lの蓋は2個体あり、59は頂部上面と口縁部上面に沈線による3重の圏線をもつ。他の1例は59とほぼ同一形態であるが、圏線をもたない。皿AⅠ（67）は底部外面をへラ削りして仕上げる。皿AⅡ（65・66）はいずれも底部外面へラキリのまま不調整。皿BⅠ（87～89）は底部外面へラ削りで、底部内面はほぼ全面に及ぶ仕上げナデで平滑に仕上げる。他に、口縁端部にやや外方に傾斜する面をもつ皿CⅠ1個体がある。底部外面はへラキリのままで不調整。高杯（76）は器高8.4 cm、杯部の径16.2 cmの小形の高杯で、杯部下面中央部をへラ削りして、

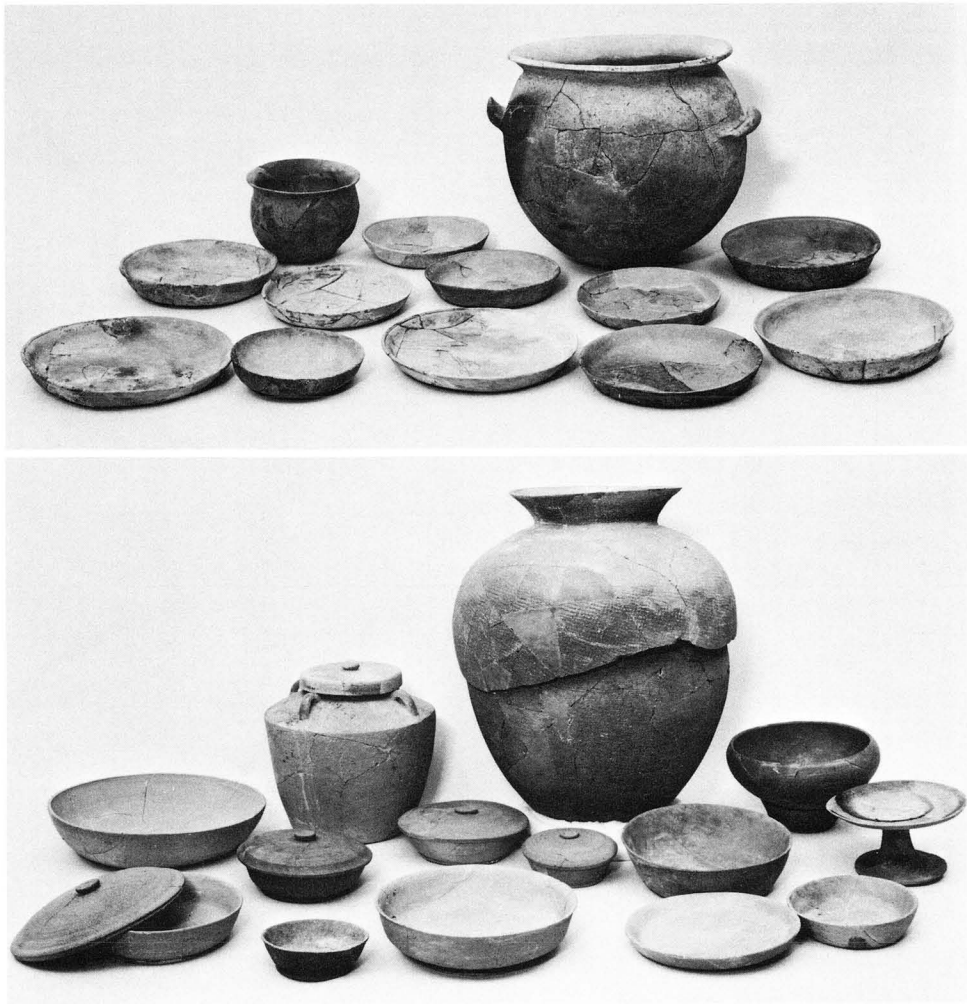


fig. 13 SK2412出土食器セット（上段 土師器・下段 須恵器）



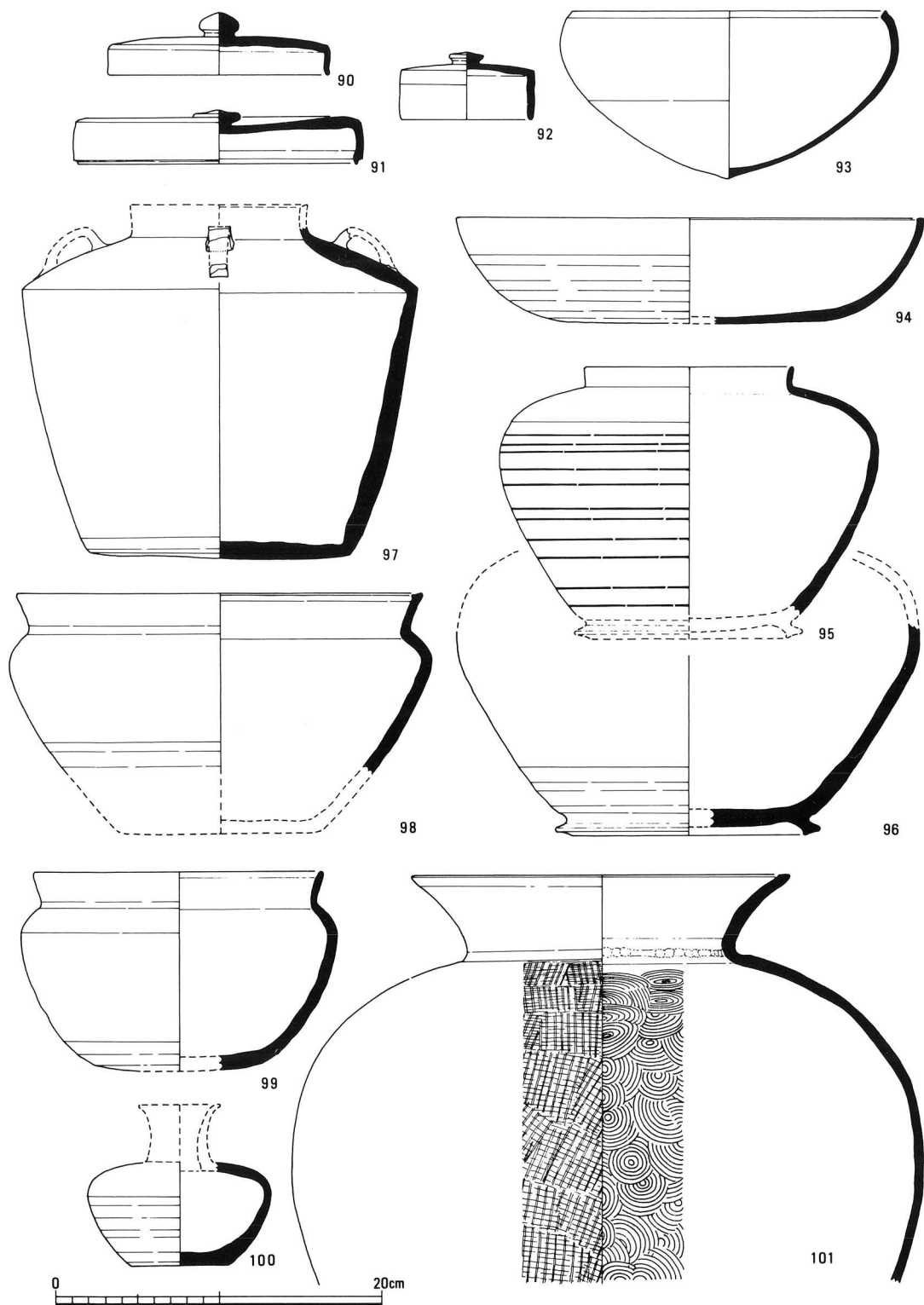


fig. 14 SK2412出土土器实测图(3)

脚部を接合する。脚柱部内面にはシボリ目が著しい。他に脚高 10.0 cm、脚裾部の径 14.8 cm、脚柱部の三方に長方形の透しをもつ大形の高杯の脚部片がある。鉢 A (93) は尖底の鉄鉢形。底部外面をヘラ削り・ロクロナデで調整した後、内外面をコテあるいはヘラによって調整し、器面を平滑に仕上げる。平鉢 (94) は土師器鉢 B に共通する形態で、平底からゆるく内反して立ちあがる口縁部と口縁端部の水平な面に特徴がある。底部外面と口縁部下半を丁寧にヘラ削りし、内面はロクロナデで平滑に仕上げる。鉢 D (98) は体部外面下半をヘラ削りする。鉢 X (99) は口径 17.6 cm の小形の鉢で、底部外面をヘラ削りし、口縁端部は丸くおさめる。壺 A (95・96) はいわゆる葉壺形。95 は体部外面の肩部以下をヘラ削りの後、ロクロの回転を利用したヘラ磨きで調整して仕上げる。96 は底部外面と体部外面下端をヘラ削りし、ヘラ磨きはない。壺 B (97) はいわゆる四耳壺である。側面をヘラ削りで調整した半環状の把手 4 個を肩部上面にもつ。体部外面下端の狭い範囲をヘラ削りし、底部外面はナデで仕上げる。底部内面もナデで仕上げるが、不十分で、成形時の指頭による凹凸が残る。壺蓋 (90~92) は頂部をヘラ削りし、扁平な宝珠形の鈕をつける。91 は焼成時の融着を防ぐために口縁端部を断面三角形にし、下方に突出させるが、90・92 は口縁端部を丸くおさめる。壺 L (100) は体部径 11.2 cm の小形の細頸壺。底部外面と肩部以下の体部外面をヘラ削りで調整する。横瓶は図示しなかったが、体部は叩き成形の後、内外面をロクロナデで調整して内面の当板痕を消し、外反する短い口頸部をつける。この SK 2412 出土例に直接接合する破片が東北部の土壌 SK 2410 で出土している。甕 A (101) は体部を同心円当板・平行叩きで成形し、口縁端部に水平の面をもつ大きく外反する口縁部をもつ。体部最大径 38.4 cm。体部下半の破片は全くみられない。他に肩部以下をほぼ完全に復原できる甕の体部 1 個体分があるが、口頸部を完全に欠失する。甕類では他に直立する短い口頸部をもつ甕 B の口縁部、広口・平底の甕 C の底部破片と、器種不明の甕類の体部破片が若干量ある。この甕類の体部破片には東北部の土壌 SK 2407 出土品と直接接合する破片を含んでいる。

須恵器の製作に使用されたロクロの回転方向は、壺蓋 (90) 1 例が左回転の他はいずれも右回転である。

#### SK 2410 出土土器 (fig. 15・22)

土壌 SK 2410 は掘立柱建物 SB 2393 の南半に重複する位置にあり、建物に先行する浅い不整形の土壌である。出土土器の中には、土壌 SK 2412 や東西溝 SD 2401 の出土品と直接接合するものがあり、これらとほぼ同時期に埋没したものと推定できる。

土師器 杯 A・杯 B・蓋・杯 C・皿 A・甕 A・甕 B と製塩土器がある。杯 A II (102) は不調整の a 手法で、内面にラセン文・方射状文をもつ。杯 A II (103) はヘラ削りの b<sub>0</sub> 手法。内面にラセン文・方射状文をもつ。102・103 とともに I 群土器。

須恵器 杯 A・杯 B・杯 B 蓋・杯 L・皿 B と甕類の体部破片がある。杯 A IV (104) は底部外面ヘラキリのまま不調整。杯 B II-1 (105) は底部外面と口縁部下端をヘラ削り

して小さな高台をつける。杯BⅡ-2（114）・杯BⅢ（112・113）はいずれも底部外面へラキリのまま不調整。杯BⅢ蓋（110・111）は頂部上面をへら削りした後、ロクロナデで仕上げる。杯BⅣ-1（108）は底部外面と口縁部下端をへら削り調整。杯BⅣ-2（107）は底部外面へら削り・ロクロナデ調整。杯BⅤ（109）は底部外面へラキリ後、ロクロナデで仕上げる。杯BⅤ蓋（106）は頂部上面へら削りの後、ロクロナデで仕上げる。皿BⅠ（115）は底部外面へら削り。口縁端部内面に一条の沈線をもつ。土師器皿Bに共通する形態である。ロクロはいずれも右回転。

#### SK 2409 出土土器 (fig. 16)

土壙SK 2409 出土土器は、極く少量である。一部奈良時代後半～末の特徴をもつものを含むが、大部分はSK 2412や他の土壙出土土器と同じ奈良時代前半に属するものである。

土師器 杯A・皿A・高杯・甕類の体部破片の他、黒色土器碗の底部破片がある。杯AⅠ（116）はC<sub>1</sub>手法。皿AⅠ（117）はC<sub>0</sub>手法。116・117ともに奈良時代後半～末の土師器食器類の代表的形態・手法をもつ。いずれもⅡ群土器。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・皿A・皿B・浄瓶・甕類の体部破片がある。皿AⅡ(118)は口縁部上端が大きく外反する土師器杯Cの模倣形態。法量も土師器杯Cに一致する。奈良時代前半に流行する形態である。底部外面はへらキリの後、ナデで仕上げる。杯BⅠ-2（119）も奈良時代前半期を代表する古い形態。底部外面はへらキリのままで高台をつける。杯BⅤ蓋（120）は頂部上面へらキリの後、ロクロナデで仕上げる。口縁端部の断面はS字形に屈曲、奈良時代後半期の特徴を良く示す。頂部下面を「杯蓋硯」として用いている。いずれもロクロは右回転。

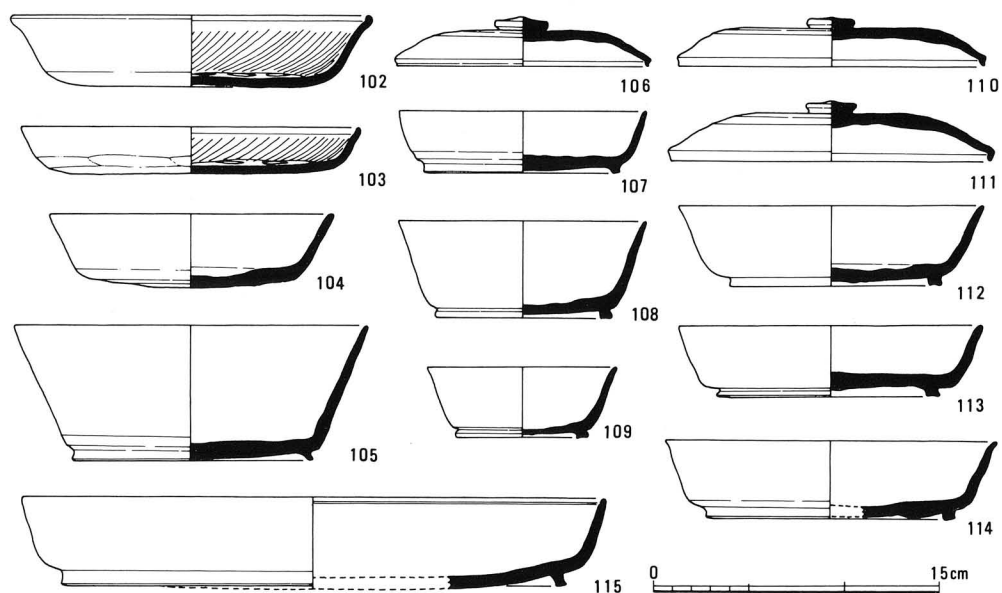


fig. 15 SK 2410 出土土器実測図

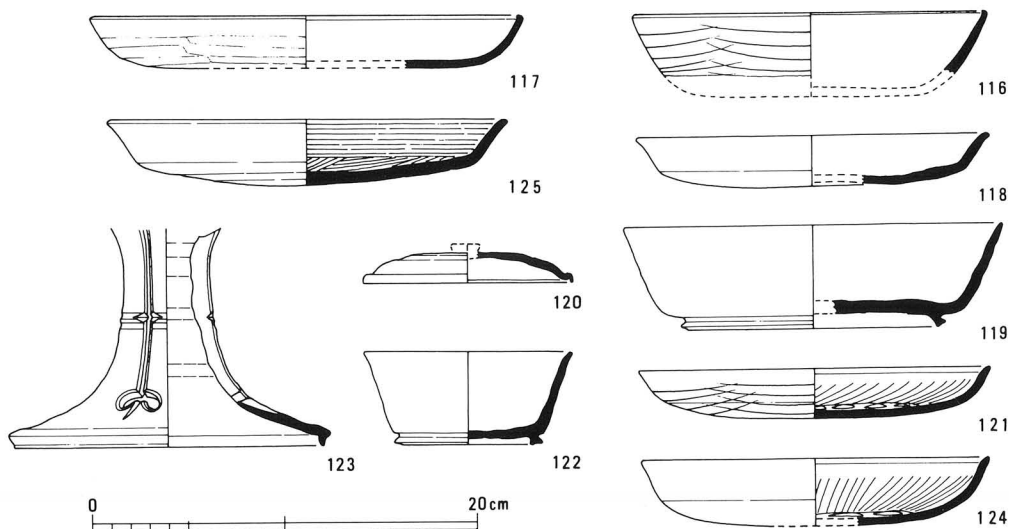


fig. 16 SK 2409(116~120)・SK 2411(121~122)・SK 2413(123)・SK 2414(124)・包含層(125)  
出土土器実測図

#### SK 2411 出土土器 (fig. 16)

土師器 杯A・杯Cと甕類の体部破片がある。杯C (121) は $a_3$ 手法。内面にラセン文・放射状文をもつ。

須恵器 杯A・杯B・杯B蓋・壺蓋・甕Aがある。杯B V (122) は底部外面へラキリのまま。底部外面を硯として使用している。ロクロは右回転。

#### SK 2413 出土土器 (fig. 16)

土壇SK 2413 は掘立柱建物SB 2395 の西北隅柱掘形に重複する小土壇。須恵器高杯(123) は脚裾部の径 16.0 cm の大形の高杯の脚部片である。脚部中位に 2 本の凹線文をめぐらし、脚柱部の三方に細い長方形の透しと、その下端に倒立した双葉形の透しをつくる。また、透し部分外側の角を削り落して面取りするとともに、双葉形の透しの中央下端と脚部中位の凹線文に重なる位置に、それぞれ細い逆三角形と横位の菱形の刻目を入れる、極めて手のこんだ装飾文をもつ。奈良時代の須恵器高杯としては他に例のないものである。

#### SK 2414 出土土器 (fig. 16)

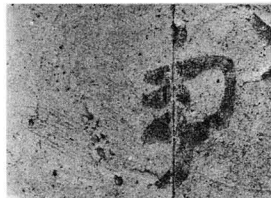
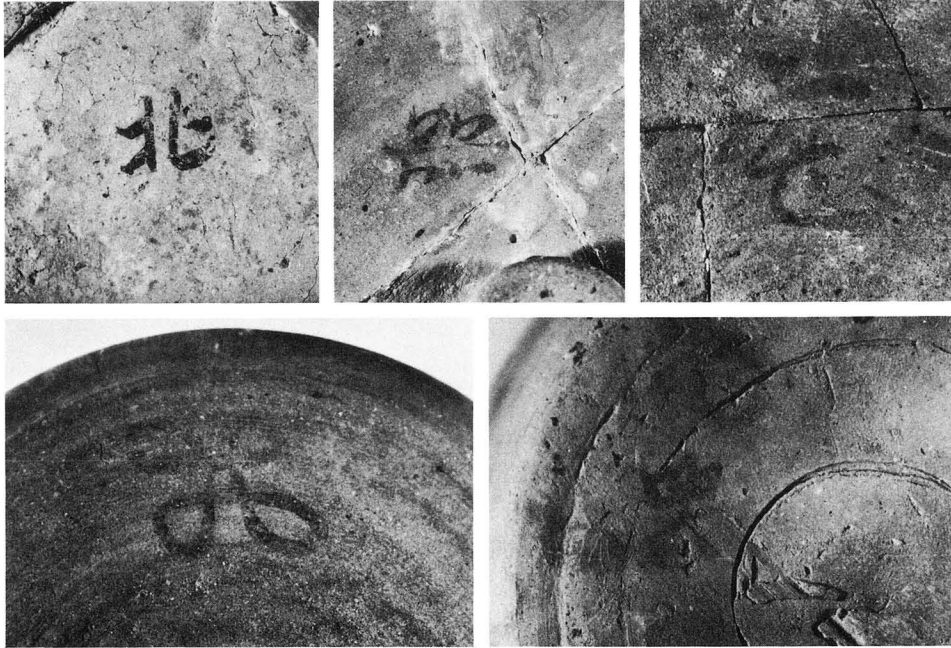
土壇 SK 2412 の北 2 m にある方形の土壇。出土土器は極くわずかである。土師器杯C (124) は $a_0$ 手法で、内面にラセン文・方射状文をもつ。

#### 包含層出土土器 (fig. 16)

須恵器皿A (125) は土壇SK 2409 出土の皿A II (118) に共通する形態。法量は土師器杯A I に相当する。底部外面へラキリのまま不調整で底部内面を不定方向、口縁部内面を横方向のへら磨きで丁寧研磨し、内面全体を黒色化する。灰褐色やや軟質であるが、胎土・成形技法・器形は一般の須恵器に共通する。須恵器をベースに作られた黒色土器として、特異なものである。

墨書土器 (fig. 17・18, tab. 1)

土壙SK 2412を始めとする各遺構から総数15点の墨書土器が出土した。出土遺構・記載内容は別表に示すとおりである (tab. 1)。土器番号は実測図の番号に一致する。



	記載内容	器種	記載位置	出土遺構	土器番号
1	北	土師器 杯A II	底部外面	SK 2412	40
2	宅	須恵器 杯A I	"	"	64
3	器	" 杯A IV	"	"	84
4	十	" 杯B IV	"	"	72
5	一	" 杯B III	"	"	73
6	大福	" 杯B II 蓋	口縁部下面	"	56
7	一	" "	頂部上面	"	58
8	器	" 杯B V 蓋	"	"	78
9	(符牒)	" "	"	"	77
10	□□	" 杯L	底部外面	"	62
11	十(カ)	土師器 杯C	"	SK 2411	121
12	尹	須恵器 杯	"	SK 2406	
13	□□	" 杯B 蓋	口縁部内面	SK 2407	
14	□	" 杯	底部外面	SB 2390	
15	□□	" 杯A IV	"	SD 2401	

fig.17 墨書土器

tab.1 墨書土器一覧

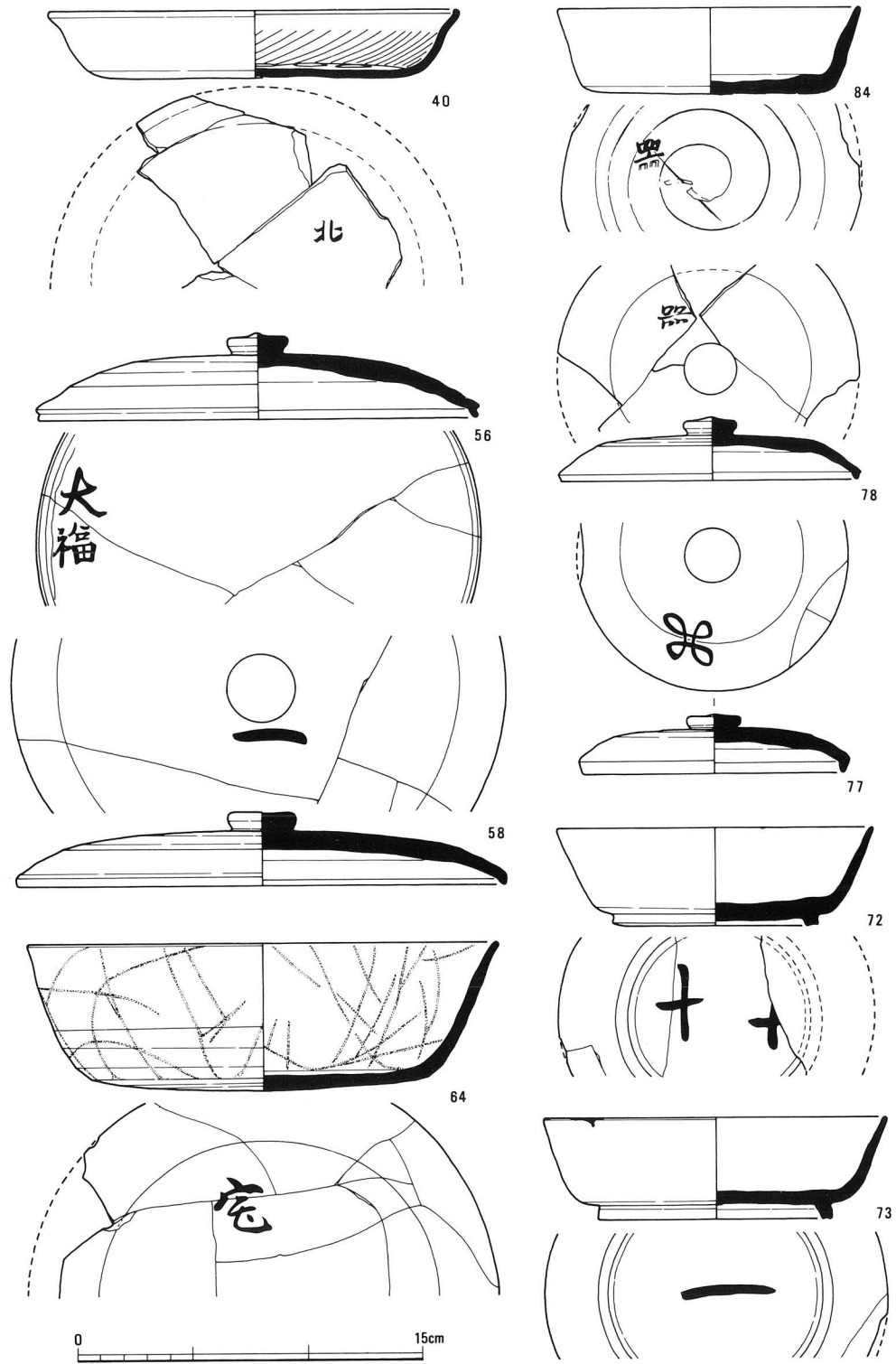


fig.18 墨書土器実測図

鉛釉陶器 (fig. 19)

土壌SK 2412 から三彩小壺の底部破片が、またSK 2412 西南方の包含層より二彩皿もしくは碗の底部の小破片が出土した。三彩小壺は高台径 4.3 cm の葉壺形に復原できる。胎土は卵色・軟質で、体部外面は外周を12等分して、6区に緑釉をかけ、残り6区を交互に白釉・褐釉で埋める。緑釉・褐釉は高台側面まで流下している。高台と底部外面及び内面は白釉。内面の白釉には貫入が著しい。底部外面に径 2.4 cm の窯道具の痕跡が残る。二彩片は 1.5 × 3.0 cm の小破片で、上面白釉、下面は緑白二彩釉をかける。

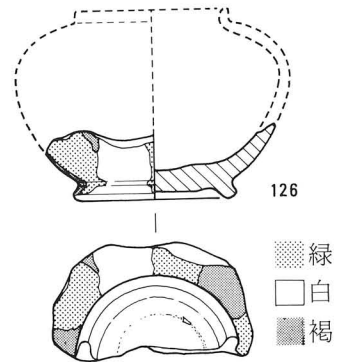


fig. 19 三彩小壺実測図

ミニチュア土器 (fig. 20)

掘立柱建物SB 2393 の南端、土壌SK 2410 の掘形直上の包含層より 2 個の手づくね土器が出土した。出土位置・層位から本来SK 2410 出土土器と一体のものであった可能性がある。その 1 (127) は径 2.3 cm、器高 1.2 cm の小形・上げ底の杯形土器。他の 1 点 (128) は器高 5.5 cm、杯部の径 8.5 cm の小形の高杯である。脚部は手づくね。杯部は粘土紐巻き上げ成形で杯部下面に粘土紐の痕跡を残す。

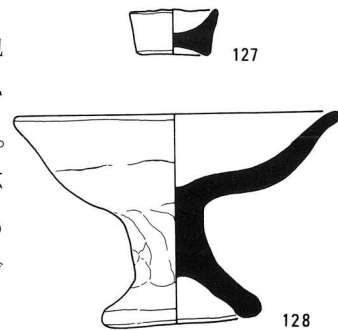


fig. 20 ミニチュア土器実測図

土馬 (fig. 21)

土壌SK 2412 から頭部破片 2 ・体部破片 3 ・尾部破片 1 が出土した。胎土・色調の特徴から土馬 3 個体の破片と推定される。破片から以下のように土馬の成形法が復原できる。まず粘土塊を棒状にのぼして胴部～尾部を作り、別に成形した前肢・後肢を接合する。次に棒状の粘土を曲げて頸部・頭部の原型を作り、下端を胴部前端にかぶせ接合する。頸部上縁をつまみ出してタテガミを作る。頭部側面に粘土紐の手綱をつけるとともに、粘土板

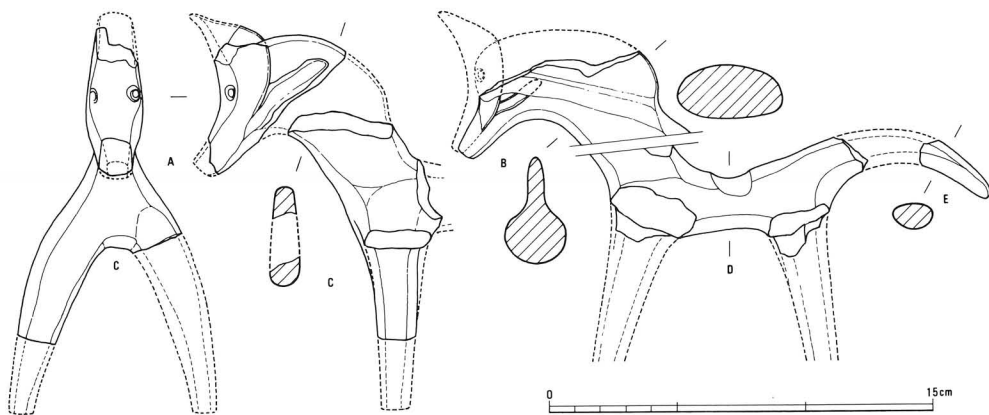


fig. 21 土馬実測図

を折り曲げて頭部にかぶせて顔面をつくり、竹管で目を表現する。胴上部を凹めて鞍を表現する。明瞭なタテガミの表現と下方へ垂れた尾、手綱、鞍の表現は奈良時代前半期の土馬の特徴を良く示すものである。この三体の土馬は前出の三彩小壺などとともに雨乞いなどの何らかの祭祀に用いられた後、他の土器破片とともに土壌に投棄されたものであろう。



fig. 22 各遺構出土土器（最上段SK2407・2408、中段上SD2401、中段下SK2406、最下段SK2410）



羊形硯 (fig. 23・巻頭写真)

須恵器杯蓋の内面や須恵器杯Bの底部外面を硯として利用したものについては既にふれたが(14・57・69・70・120・122)、調査区ではこれらの転用硯の他に、掘立柱建物S B 2393の南妻柱列東第2柱穴の掘形から、羊形硯の破片とみられるものが出土している。

出土した頭～胸部破片は、左右とも基部と先端を除く角の大部分を失っているが、復原される角の形態と両頬にみられる顔毛、胸部にみられる波状の体毛の表現から、羊を形どったものと推定される。肩部上面に筆の穂先をそろえる際についたとみられる墨痕がある

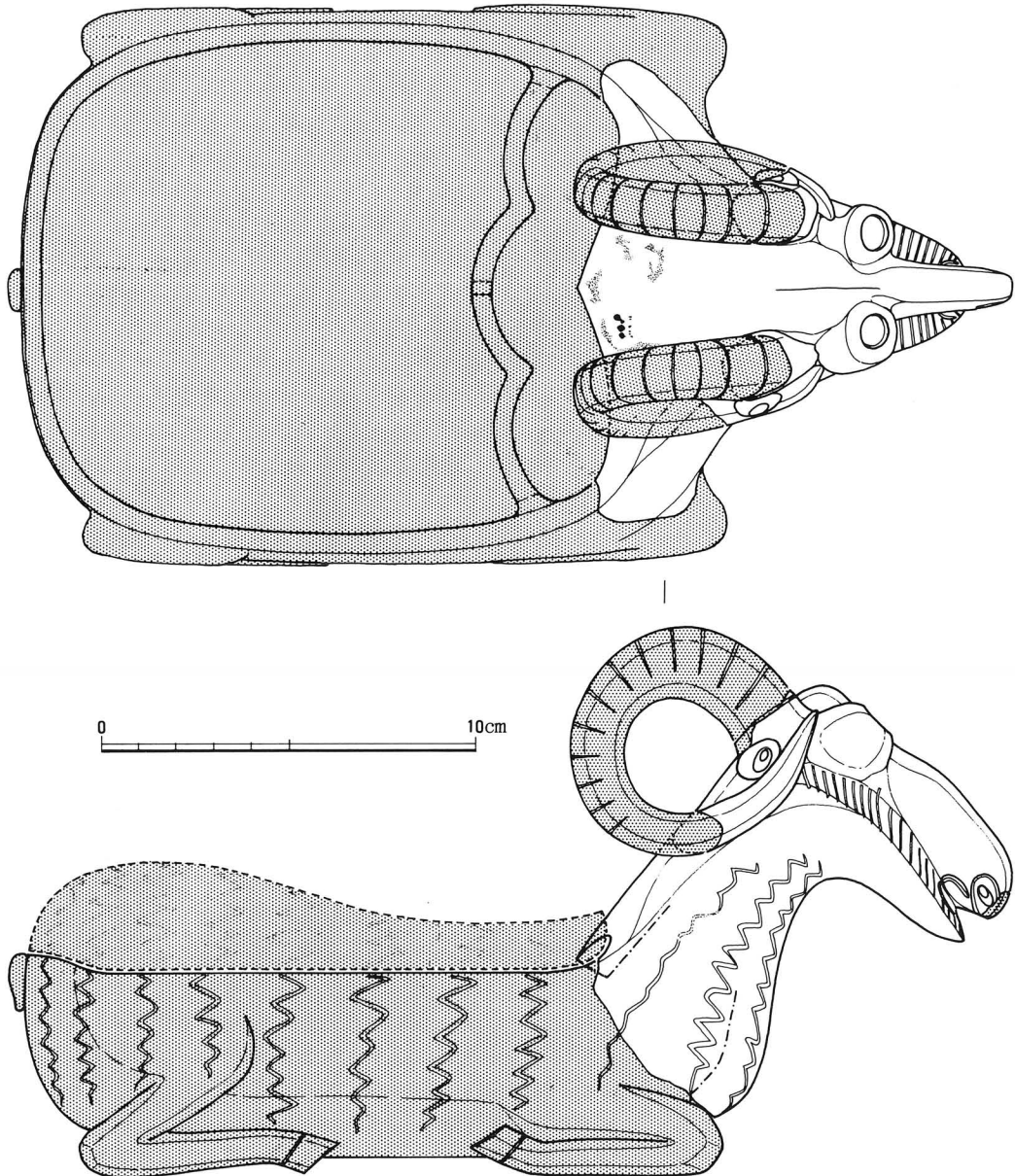


fig. 23 羊形硯実測図(アミ部分は復原)

こと、またこの部分の形態が従来知られている形象硯の造形に一致することから羊形形象硯の一部と判断した。胎土・焼成は青灰色やや軟質の須恵質。胸部・肩部は厚さ 1.0 cm 前後で内部は空洞であり、頭部は充実している。胸部から下顎部と肩部～頭・上顎部の二枚の粘土板を上下に接合して成形したものと推定される。これに半球状に突出した眼と別途成形した角・耳を接合して羊の基本型を作り、竹管で眼球を、へら押しと刺突により鼻・口・耳孔を表わし、また鋭いへら描き沈線で顔毛と角紋、浅いへら描き波状文で体毛を描いて仕上げる。頭部～肩部は無文。図及び写真は、平城京左京八条三坊（東市東北地域）出土の前肢を折りたたんで休息する獣形硯の胸部～前肢部破片、あるいは隋・唐の明器にみられる羊の造形を参考に原形を復原したものである。

羊形硯の埋没時期については、羊形硯を出土したSB2393 柱穴の出土土器が、いずれもSB2393 に重複する土壙SK2410 出土土器と同時期のものであることから、SK2410 に他の土器類とともに投棄され、偶然建物SB2393 の柱掘形にまぎれ込んだとする見方と、建物SB2393 の造営に際し、その柱掘形に意識的に投入したとする見方があり、その時期を限定することができない。前者であれば奈良時代前半、後者であれば奈良時代中頃ということになる。いずれにしても、奈良～平安時代のわが国における羊の造形として唯一の例であり、また獣形<sup>(3)</sup>形象硯の獣形を確認できる初めての例としても重要な資料である。

### まとめ

整理の結果、調査区内の各所で検出された土壙SK2407・2408・2410・2412・及び溝SD2401 の出土土器は、その中に互に接合する同一個体の破片を含み、溝SD2401 の埋没と同時期に相次いで廃棄・埋没したことが明らかになった。土壙SK2412 出土土器に代表されるこれら一群の土器の編年の位置については、土師器食器類の器種構成と法量、特に

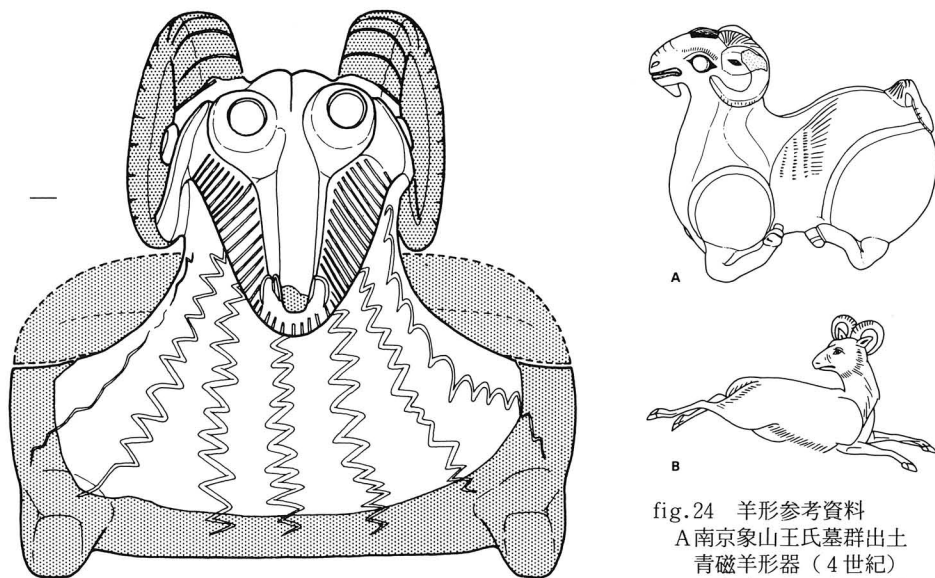


fig.24 羊形参考資料  
A 南京象山王氏墓群出土  
青磁羊形器（4世紀）  
B 正倉院銀壺羊文（8世紀）

平城宮Ⅲに出現する新しい器種である土師器碗Aを全く含まないこと、須恵器杯B類の形態的特徴すなわち高台位置・形態、及び杯B蓋に平城宮Ⅲ以降顕著になる口縁部の屈曲がほとんどみられないことなどから、平城宮Ⅱの新しい段階に位置づけることができよう。実年代としてはほぼ天平年間（729～749）中頃の土器ということになる。

土壙SK 2412 出土土器を例として、その内容をみると（tab. 3）、土師器と須恵器の個体数比は45：55の割合であり、平城宮Ⅱ及びⅢの標式遺構である平城京左京一条三坊の溝SD 485・平城宮内裏北外郭の土壙SK 820 出土土器の例に比べかなり須恵器の量が多い。また土師器・須恵器の食器類が占める割合は71%であり、平城宮造宮前の集落の土器である下ツ道西側溝SD 1900 出土土器やSD 485 出土土器の例に近似し、SK 820 出土土器、他の宮の土器に比べて食器の占める割合がかなり低い。これは別表（tab. 2）にも明らかのように、宮において特に土師器食器類が多用されたことによるものである。

食器類の器種構成をみると、口径15.0cm・器高2.7cm前後の土師器杯AⅢがなく、かわってほぼ同法量の須恵器杯BⅢが多用されていること、器高5cmを越える「碗」に相当する深い器形の土師器がなく、口径18～22cm・器高6cm前後の須恵器杯AⅠ・BⅡ—Ⅰ・Lがその用に充てられていることが指摘できる。また土師器・須恵器の食器の間には、土師器杯Cと須恵器皿AⅡ、土師器碗Cと須恵器杯AⅣ、あるいは土師器皿AⅠと須恵器皿AⅠ・CⅠなどのように、ほぼ同形態・同法量の食器があり、これらが互にその用途を兼ねるものであったことは明らかである。これらの食器数種を組み合わせると食膳が構成されるわけであるが、巻末写真にその一例を示して天平の時代の食膳をしのおこととした。

土壙SK 2412 他の出土土器の内容を「宮の土器」と「京の土器」という比較の視点で見ると、食器の占める割合の他にもいくつかの興味ある問題点を指摘することができる。まず第1は既に述べた食器類の器種構成にみられる特質であり、土師器食器類においては口径15cm以下の小形の食器（杯AⅢ・碗C・皿Cなど）がほとんどみられないこと、また逆に器高5cmを越える深い器形の大型食器が全くみられないことが指摘できる。一方須恵器においても口径18～20cm・器高5cmを越える大型の食器はごくわずかである。こうした器種構成の特徴は、様々な身分を含む多人数の饗応を背景とする宮の土器に対して、日常の食生活の内容に対応して購入され、使用される京の土器の特性の一端を示すものであろう。第2に、須恵器食器類の中に、同時期の宮の土器にみられない特殊な製品を含んでいることが指摘できる。その1は碗形の須恵器杯Lの存在である。平城宮における現在までの調査で出土した大量の須恵器の中でも杯Lは極めて出土例の限られたものであるが、今回の調査区では土壙SK 2412 他の出土土器に一般的にみられる。その2は、東海地方の製品とみられる糸切底の杯B（81・82）の存在である。これもまた同時期の宮内出土土器には全くみられないものである。こうした宮の土器には一般にみられない杯Lの盛行や、遠隔の生産地の製品の存在は、平城京における土器の流通という大きな課題に対して、一つの手懸りを与えるものであろう。

遺構	用途	土師器(%)	須恵器(%)	計(%)
SD 1900 (集落)	食器	85 (27)	112 (35)	197 (62)
	貯蔵器	12 (4)	26 (8)	38 (12)
	煮炊具	84 (26)	0	84 (26)
	計%	181 (57)	138 (43)	319 (100)
SD 485 (京)	食器	398 (39)	271 (27)	669 (66)
	貯蔵器	23 (3)	104 (10)	127 (13)
	煮炊具	213 (21)	0	213 (21)
	計%	634 (63)	375 (37)	1009 (100)
SK 2412 (京)	食器	33 (33)	38 (38)	71 (71)
	貯蔵器	3 (3)	17 (17)	20 (20)
	煮炊具	9 (9)	0	9 (9)
計%	45 (45)	55 (55)	100 (100)	
SK 820 (宮)	食器	409 (65)	175 (28)	584 (93)
	貯蔵器	8 (2)	14 (2)	22 (4)
	煮炊具	20 (3)	0	20 (3)
	計%	437 (70)	189 (30)	626 (100)

tab. 2 出土土器の構成一覽

註

1. 平城宮 I 群土器・II 群土器については『平城宮発掘調査報告 VII・IX・XI』を参照。
2. 平鉢—土師器鉢 B に共通する形態 (新名称)。
3. 前出、平城京左京八条三坊 (東市東北地域) の他、平城京左京五条二坊十四坪でも獣形硯の破片が出土している (『奈良市埋蔵文化財調査報告書—昭和54年度』、1980)。

平城宮土器編年 (『平城宮発掘調査報告 VII』1978 にもとづく)

	主要遺構	略年代	年代推定の根拠
平城宮 I	SD1900	710	木簡 701~710年
" II	SK2102	730	" 728~729年
" III	SK2101	750	" 746・750年
" IV	SK 219	765	" 762年
" V	SK2113	780	" 758年以降

土師器			I 群	II 群	その他	計	%	
杯	A	I	3	3		6 4 } 10	33	
		II	1	3				
	B		1		1			
	C	4	5		9			
	E		1		1			
	F		1		1			
皿	A	I	2	2		4	12	
椀	C		1	1		2		
高杯			3	1		4		
鉢	B		1			1		
壺	D				3	3		
甕	A		5			5		
	B		4			4		
小計			24	18	3	45		45
須恵器			I 群	II 群	その他	計		%
杯	A	I	1			1 3 } 4		38
		IV	3					
	B	II	4			4		
		III	9			9		
		IV	3		1	4		
	V	3		1	4			
L	2			2				
皿	A	I	1			1		
	A	II	2			2		
	B	I	3			3		
C	I	1			1			
高杯		2			2			
平鉢		1			1			
鉢	A		1			1		
	D	1			1			
	X	1			1			
盤	A	1			1			
壺	A	4			4			
	B	2			2			
	L	1			1			
浄瓶		1			1			
平瓶		1			1			
横瓶		1			1			
甕	A	2			2			
	B	1			1			
	C	1			1			
小計			52	1	2	55	55	
三彩小壺				1		1		
総計						101	100	

tab. 3 SK 2412 出土土器個体数表

測定可能なものの個体数を示す。杯 B・壺類の蓋は個体数に含まない。

## 2. 屋瓦 (fig. 25)

軒丸瓦 2点、軒平瓦 1点が出土した。ほかに丸・平瓦の破片が若干ある。

軒丸瓦は6308型式および6311C型式と呼ばれるもの<sup>(1)</sup>、両者とも遺物包含層から発見されており、遺構に伴ったものではない。6308型式は複弁8弁蓮華紋の周囲に凸線鋸齒紋と珠紋をめぐらせる。蓮弁の線は繊細、やや立体感に欠けるが、均整のとれた形である。A～D、F～J、L・Nの11種に細分されるが、本例は中房を欠いた破片のため種別まではわからない。6311型式も6308型式によく似た複弁8弁蓮華紋軒丸瓦である。中房が弁区より一段低い点などによって6308型式と区別される。A～Dの4種があり、本例はC種に属する。Cは蓮弁の外周をめぐる珠紋と線鋸齒紋の数がどちらも16で、他種に比べて少ない。A・B両種は平城宮内裏地区から多量に出土し、「内裏型式」と呼ばれるが、C種は出土量も少なく特定の地区とは結びつかない。

軒平瓦は6721型式に属する。これは5回反転均整唐草紋の周囲に珠紋帯がめぐるもので、A、C～Kの10種に細分される。SA2405の柱掘形の一つから出土。左端部近くの細片のため種別は判断し難い。

出土した3点の軒瓦はいずれも「平城宮式」として通有のものである。平城京内の諸遺跡においては、平城宮式の軒瓦が大半を占めるばあいと、平城宮式とは異なる京特有の軒瓦が多く出土するばあいとがある。前者の例は極めて少なく、宮と密接な関係のある官衙や離宮のような遺構と<sup>(2)</sup>考えられている。今回の左京四条四坊九坪のばあい、出土したすべての軒瓦が平城宮式であるとはいえ、あまりにも点数が少なく、どちらのケースとも断定することはできない。

1. 型式番号は奈良国立文化財研究所が設定したもので、番号のつけ方等詳細については同研究所『基準資料I 瓦編1』(1973年)の解説を参照されたい。
2. 平城宮式軒瓦が大半を占めた例としては平城京左京三条二坊六坪、同五条二坊十四坪が知られている。京特有の軒瓦が多い場合は多数あるが、左京三条二坊十五坪が典型的な例として掲げられる。

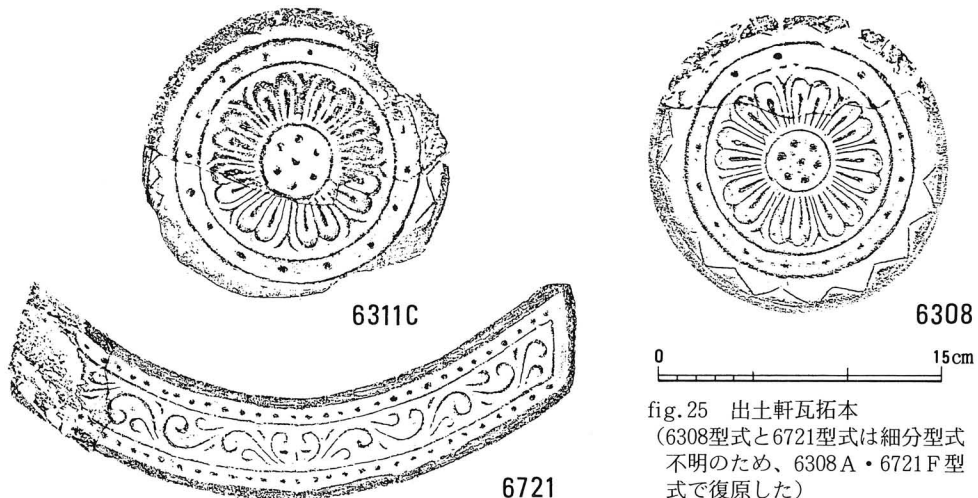


fig. 25 出土軒瓦拓本  
(6308型式と6721型式は細分型式不明のため、6308A・6721F型式で復原した)

### 3. 銭貨 (fig. 26・27)

**SK 2408 出土銭 (fig. 27)** 長方形土壙SK 2408から100枚近い銭が一括出土した。fig. 27にみるように、銭の穴に紐を通した差銭の状態をよく留めている。出土遺構SK 2408は調査区東北隅にあり、東西溝SD 2401、土壙SK 2407と重複する長辺2.2 m、短辺0.7 m、深さ0.65 mの長方形土壙である。銭は土壙中央南よりの埋土中位から出土した。銹化が進み相互の銹着が著しいため、出土状態のまま取り上げて、次節に述べるような保存処理を行なった。現状における肉眼観察では92枚が確認できるが、X線の透過により新たに3枚+ $\alpha$ が確認され、発見時に遊離した2枚を加えると総数は97枚を越える。銭文を確認できる6枚の銭は、いずれも隸開の和同開珎である。伴出土器の年代から他種銭を含む可能性はうすく、和同開珎100枚を一本とする差銭を埋納したものと考えられる。

**SB 2390 出土銭 (fig. 26)** 掘立柱建物SB 2390の身舎東北隅の柱穴から、和同開珎が一枚出土した。やはり隸開と同で、銹化が進行し銭文の一部を欠損する。SB 2390は今回検出した最大の建物で、身舎東北隅の柱穴には柱痕跡の周囲に根固め状の施設が認められる。銭はこの施設の下、柱掘形の底面に近い埋土中から出土した。建物の造営に際して埋納された地鎮具とみられるものである。京内にも二・三の類例がある。

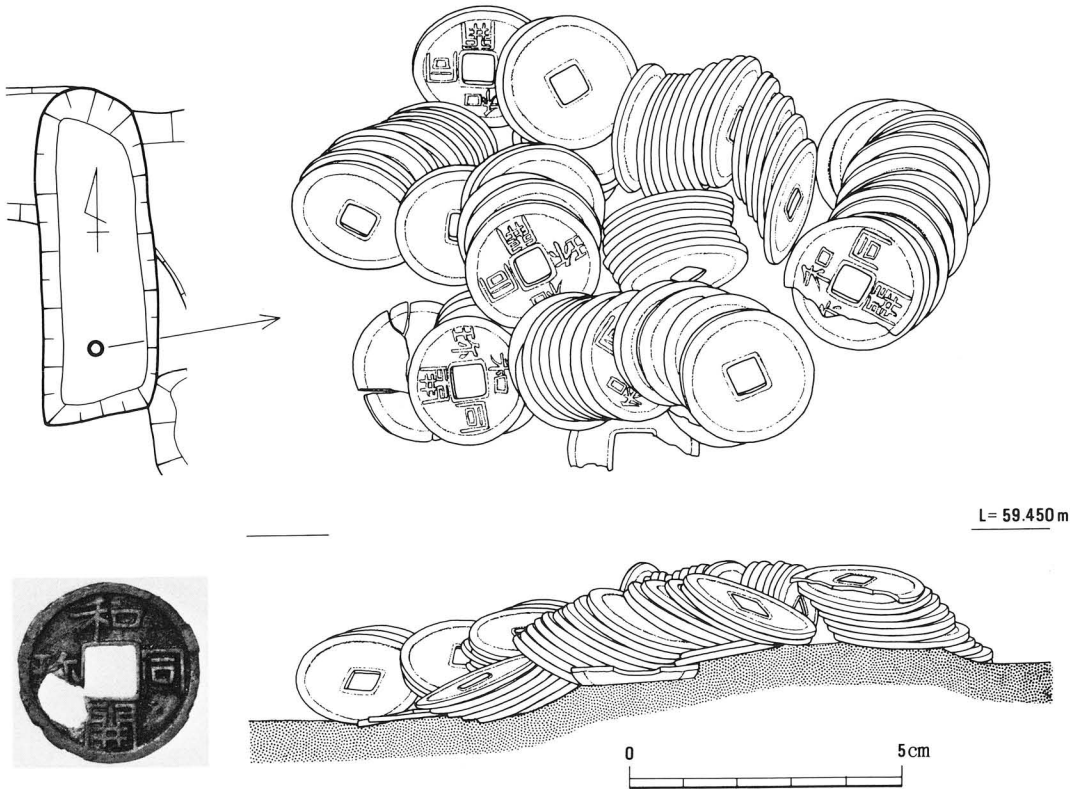


fig. 26 SB 2390出土銭

fig. 27 銅銭出土状態実測図 (SK 2408)

#### 4. 採取遺物・遺構の保存

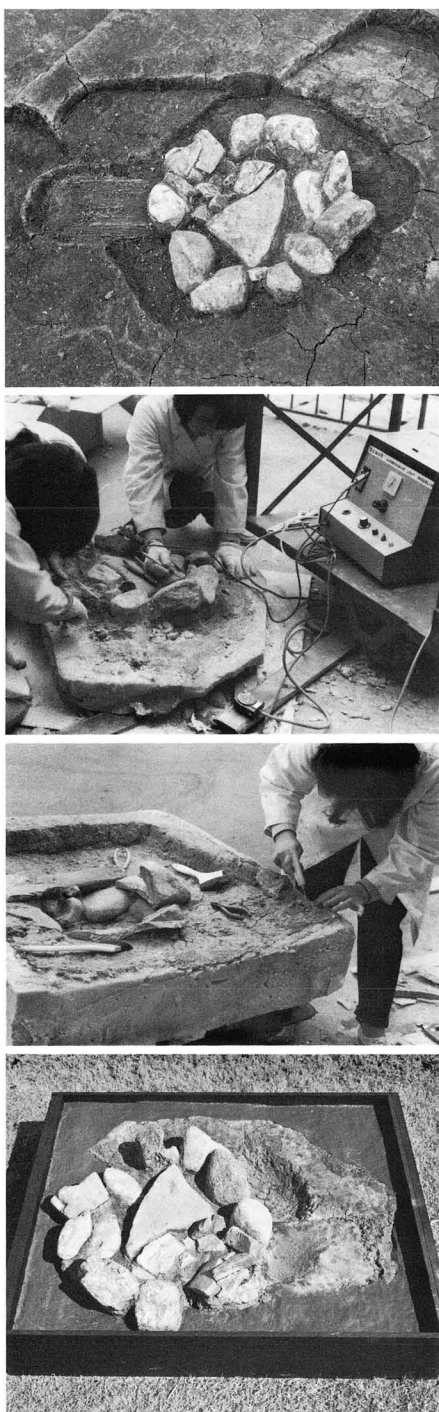


fig. 28 柱穴根巻石の保存処置

柱穴根巻石の移設保存 (fig. 28) 根巻石や礎板が残存する柱穴を取り上げ、博物館などで展示ができるように保存処置を行なった。取り上げた遺構の柱穴は、SB2390の北側柱列のうち2箇所、75×93、85×104 cmの範囲である。

まず、それらの周辺の土壌を削除し、偏平な直方体の形状に切り出す。柱穴の表面には、湿った不織布（ポリエステル製で和紙のような柔軟性のある布）を張り付け、湿拓をとる要領で遺構表面によく密着するようにする。不織布は取り上げの際、梱包・保護のために使用するウレタンフォームが遺構面に直接付着しないようにするものである。ウレタンフォームの原液は、イソシアネート成分とポリオール成分とから成る。これらを等量混合攪拌すると発泡を開始し、数分後には発泡スチロール状のウレタンフォームが形成される。したがって、現場でも容易に取り扱うことができ、しかも、発泡体の密度が0.03（体積100 cm<sup>3</sup>の重量が3 gに相当）ときわめて軽量であり、こうした遺構取り上げの梱包保護材料としては最適といえる。従来、石膏やコンクリートが利用された例はあるが、堅固であるために、移設したあとの梱包解除が困難となる。一方、ウレタンフォームの場合には材質が発泡スチロール状のものであり、梱包解除は容易である。なお、コンクリートと同等の強度は持たないが、あらかじめ、遺構部分を鋼材などで枠組みしたり、部分的にモルタルや合成樹脂などを注入して強化すれば、古墳や窯跡などの大型の遺構でもウレタンフォームを利用して取り上げることが可能である。

ウレタンフォームで梱包した遺構は室内に搬入し、裏面の土壌にはイソシアネート系合成樹

脂をしみこませて硬化した。さらに、エポキシ系接着剤を用いてガラス繊維を張り重ね、裏打ちをする。こうして強化した遺構を事前に準備した木製の箱に納め、ウレタンフォームを利用して固定した。すなわち、ウレタンフォームは、どのような形状の狭隘な空間をも充填することが可能なので、特に、底部や周囲の隙間を充填することができる。木箱に納められた遺構の根巻石を相互に固定したあと、土壌部分にはイソシアネート系合成樹脂を浸透させて硬化した。なお、礎板については、別途、ポリエチレングリコール（ワックスのような高分子物質）を含浸させて硬化し、原位置にもどすことにした。

**和同開珎の保存処理 (fig. 29)** 長方形土壌SK 2408 出土の銭貨の大半は完形を保っていたが、保存状態は良好でなく、錆化して互に固着しているので、個々を取り上げることはせず、出土状態のまま観察できるように周囲の土壌ごと切り取って保存処理した。

土壌には大量の水分が含まれており、自然に乾燥させるとひび割れが発生し、また、サビの進行も危惧される。土壌にエチルアルコールを散布しながら徐々に乾燥させる方法を繰り返した。十分に乾燥したあと、アクリル系合成樹脂を含浸して強化した。銭貨には、アクリル系合成樹脂に3%程度のベンゾトリアゾールを混合した樹脂溶液を塗布・含浸して、銭貨のサビの進行を防ぎ、同時に銭貨自体の強化をはかった。ベンゾトリアゾールは、サビに含まれる塩化物と銅を固定し、腐食の進行を抑制する作用を持っている。硬化された銭貨は塩化ビニール製の箱（縦15×横18.5×高さ5cm）に納めて仕上げとした。



fig. 29 和同開珎の保存処理